

サステナブルライフスタイル (2024 年 10 月)

2025 年,家庭と社会のすがた

“成長の限界とサスナビリティ”

ライフスタイルというのは、一人ひとりの暮らし方の“技術”といえそうです。その時代のテクノロジーは、家庭における技術のあり方が色濃く反映されるからです。大量生産、大量消費、大量廃棄を推し進め、地球の自然を大きく脅かしている技術文明は、20 世紀に生きた人々が追い求めた「豊かさ」を映す鏡でした。では 21 世紀の未来社会の鏡にも、私たちは変わらぬ姿を映し続けるのでしょうか。ファンタジー作家のミヒャエル・エンデは、かつて経済人を対象とした講演で、50 年後の世界を描く“未来ゲーム”を提案しました。でも、目先の経済成長率にとらわれていた聴衆は、誰ひとりエンデの呼びかけには応えませんでした。それから数十年を経た今、私たちはどんな想像のゲームを受け継いでいるのでしょうか。素敵なゲームを「専門家」だけの世界にしておくのはもったいないですね。大人たちは誰しも希望をつなぐ“贈り物”を子供たちのために探し求めているのですから。エンジニアとして時代の変遷をみつめながら環境・エネルギー問題に真摯に向き合ってきたコラムニストの松村真さんも、ユニークな未来ゲームの創作者です。“サステナブル・ライフスタイル”は、ある家族の日常をモデルにして、近未来に期待される「持続可能なライフスタイル」と「低エネルギー・循環型社会」の姿を映し出していきます。この物語が、あなた自身のライフスタイルを考えるささやかなヒントとなりますように。

(省エネルギーセンター・編集部)

“人類の危機”を告げる書物 “

もう大分前になるが、ローマクラブが 1972 年発表した「成長の限界」という本を読んだときの衝撃を今も忘れない。タイトルのインパクトが強かったこともあるが、地球の人口増加と資源消費を予測し、健全な経済成長と環境保全には消費の抑制が必要と説く主張に説得力があった。しかし当時の日本は重化学工業や大型コンビナートの建設が続いており、素材産業の拡大を基盤とする高度経済成長のまっただ中であつた。誰もが生活を豊かにしてくれる経済成長の夢を追いかけ、収入は年々増加し、3C と呼ばれたカラーテレビ、自家用車、クーラーの普及が続いていた。一方、年々増加するエネルギー消費のために大気が汚染し、東京から富士山が見えるのは工場が操業を止める正月休みと、強風と雨が空を大掃除する台風直後だけだった。このような環境汚染を背景に 1971 年に環境庁（現在は環境省）が設置され、環境関連法規が整備され始めていた。当時の主な環境問題は大都市と工業地帯の大気汚染だったから、対策は汚染物質の除去が中心で資源消費の抑制ではなかった。1973 年には中東戦争を契機に石油危機が発生し、街ではネオンやイルミネーションが姿を消した。産業界は競って省エネルギー対策を始め、ボイラーや加熱炉の運転管理を強化して設備の改善も進めた。でも当時の省エネルギー対策は、価格が 4 倍にも急騰したエネルギー費用の節減が目的だった。だから省エネルギー対策の指標は費用対効果が重要で、地球温暖化の原因である二酸化炭素の排出抑制ではなかった。当時の環境とエネルギー問題に関

する認識は、地球環境問題の視点とは大きく異なっていたといえるだろう。

そんな時代に「成長の限界」は、環境問題を「公害」という現象面からではなく、経済成長と資源消費の面から根源的に捉えて警告を発したものだ。当初は将来予測の不確実性を指摘する反論や異論も出されたが、多岐にわたる詳細な分析と、コンピューターを駆使した大胆な予測に賞賛の声も大きかった。この本の何よりも重要な意義は、大量生産と大量消費に限界があることを指摘し、経済成長路線の軌道修正を提案した点にあるだろう。世界も日本も、ひたすら生産の増大による経済成長に向かって走り続けていた渦中に、「成長の限界」が浮き彫りにした限界と軌道修正の提案は、人々に強烈な印象を与えたのだ。その後も生産は拡大をし続け、80年代に入ると地球温暖化や酸性雨など、資源の大量消費に起因する地球規模の環境問題が顕在化した。「成長の限界」が示した予測が現実味を帯びてきたのである。

暮らしと社会の“持続可能性”

1987年には国連のブルントランド委員会が、環境保全の理念として持続性を意味する「サステナビリティ」という概念を提唱した。「サステナビリティ」というキーワードは、抽象的ではあるが感覚的に解りやすい概念のため、世界的に認知されるようになった。そして、この理念を実現する方法の一つとして、1996年に資源消費の継続的な低減を求める環境マネジメントシステムが発足した。ISO14000と呼ばれたこの国際規格は、その後、欧米先進国だけでなく新興国の企業にも広く普及している。サステナビリティは、「持続性のある発展」を意味する「サステナブルデベロップメント」と言う熟語で使われることが多い。この概念は持続可能なライフスタイルと、それを支援する社会システムがあって始めて実現できるものであろう。ちなみに、日本の資源とエネルギー消費状況を概観すると、2010年の時点で石油・石炭・天然ガスなどのエネルギー資源を、1人1日約10kg消費している。これに鉄やアルミニウムなどの金属資源と、木材や食料を加えると、1人1日約15kgの資源消費量になる。この資源消費量は人の体重の20%にも達するから、われわれは過食に陥った「現代の恐竜」といっても過言ではない。このような資源とエネルギーの大量消費は、誰が考えても持続性のある発展からほど遠いことが明らかであろう。だが、本当にこれほどの資源消費が必要だろうか。わずかな利便性と快適性のために、あまりにも多くのエネルギーと資源を使っているのではないだろうか。経済性の追求には熱心だが、その一方でエネルギーと資源の利用効率を犠牲にしてはいないだろうか。利便性や快適性を損なわない範囲でも、何割かの資源とエネルギーの消費を抑制できるのではないだろうか。

今日では環境意識の高い市民が増えており、エネルギーと資源の消費を抑制する総論に反対する人は少ない。だが個人は何をし、企業は何を提供し、社会は何を支援すればよいのかという各論は、まだ十分には語られていない。これまでマスメディアを通して断片的な提案は紹介されているが、問題が大きく多様なために、実行可能性や定量的な効果の予測が十分ではないことが多い。“サステナビリティ”を実現するためには、身近で実行可能なライフスタイルの実現と、それを支援する社会システムの整備が必要なのである。このため本稿では、とりあえず2025年頃の近未来を想定し、「低エネルギー・省資源社会」のあり方を多面的に描いてみることにした。

近未来へのガイド、山川家の人々

身近なライフスタイルを描くのだから、モデルとして平凡なサラリーマン家庭に登場してもらい、家族全員のライフスタイルを紹介するという手法で物語を展開していく。

山川 護（やまかわ まもる）：

主人公の山川護さんは現在 52 才、某家電メーカーで営業を担当している。この会社には途中入社だが、すでに社歴 15 年を経て、大型量販店と東京近郊の販売代理店を任されている。家は横浜の郊外にあり、バスと電車を乗り継いで東京の中央営業本部に通勤しているが、片道でほぼ 1 時間と 15 分かかる。週のだいたい半分はお客さん回りで、直行直帰も珍しくない。住宅はまだローンが残る木造の一戸建てで、約 15 年前に大手住宅メーカーの建売りを買ったものである。土地は約 60 坪と広くはないが、多少のゆとりがあるので庭に小さな花壇を作っている。建物は約 100 平方メートルの 2 階建てで、2 階には二人の子供の部屋と護さんの小さな書斎がある。家族は 48 才の奥さんと 23 才の長女、それに 20 才の長男の 4 人で、犬と猫が 1 匹ずついる。犬は長男が小学生のときに近所の公園に捨てられていた雑種だが、もうすっかり家族の一員になっている。護さんの趣味はテニスで、週末には気の合った仲間とクラブでプレイを楽しんでいる。

山川 美子（やまかわ よしこ）：

奥さんの美子さんは若い頃は OL をしていたが、結婚して子供が生まれてから専業主婦になった。だが子供が大きくなって家事にゆとりができたので、7 年前から近所のスーパーマーケットでレジの仕事をしている。勤務時間の短いパートとはいえ、もうかなりの年数になるのでレジ作業の早さとの確さには定評があり、店長と同僚から重宝がられている。パートの時間単価はもう 5 年も昇給がないが、物価が安定しているので収入が増えなくても生活の不安は感じない。職場の近くには洒落たインテリアのコーヒーショップがあり、仕事帰りに友人達とおしゃべりとケーキを楽しんでいる。ダイエットが気になるのでケーキは我慢したいのだが、味と雰囲気と空腹の誘惑に勝てないことが多い。

山川 清子（やまかわ きよこ）：

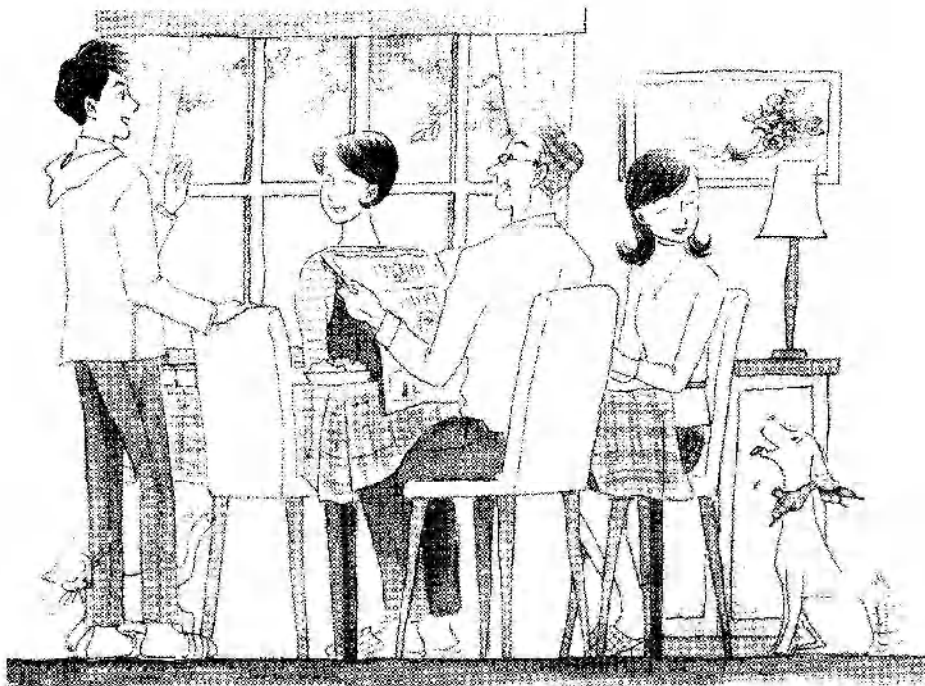
長女の清子さんは 23 才の大学 4 年生で、来年は卒業して就職するか大学院に進むか迷っている。専攻は理工学部のエコロジー学科で、環境分野全般を対象にしている。必須科目には生物学や化学だけでなく、生態学や地球物理学、それに工学者倫理やコミュニケーション学まで含まれている。選択科目には歴史や経済の分野もあり、広範囲な教養教育が提供されている。エコロジー学科は広い範囲を扱うので、受講する科目の専門性はそれほど高くないのだが、関連する分野と科目があまりにも多い。清子さんは生物に関心があってこの学科を専攻することにしたのだが、環境問題について学んでいるうちに次々に気になる範囲が広がり、今では環境経済学まで受講している。だから大学に残ってもっと広く深く勉強してみたいという気持ちと、早く社会に出て実際

の仕事を通じて知識と経験を積みたいという気持ちが揺れ動いている。受講科目が多いだけでなく研究室のゼミにも準備が必要で結構忙しいのだが、学生時代に海外旅行もしたいし、おしゃれも楽しみたい。それには多少なりとも軍資金が必要なので、夜間でも働けるコンビニでアルバイトをしている。

山川 豊（やまかわ ゆたか）：

長男の豊さんは20才で、現在インテリアデザインの専門学校に通っている。高校を卒業したときには大学に進学しようとしたのだが、試験勉強が嫌いなので1年浪人しても希望校には入学できなかった。それに特に好きな学科があるわけでもないのに、2浪してまで大学に進学するよりは職能が身につく専門学校に入ったのである。専門学校は大学より楽かというところではなく、入学は容易だが勉強は結構大変である。次々に課される宿題をこなし、レポートを提出しないと落第してしまう。留年する者や途中で諦めて退学する者も少なくない。でも豊さんはこの学校に入ってからインテリアデザインに興味を持ち、今は人並みに勉強するだけでなく、展示会なども見に行くようになった。いまのところ将来はこの分野の仕事をしたいと思っており、専門学校に入ってよかったと思っている。バイクが好きで、お母さんの心配をよそに休日には仲間とツーリングを楽しんでいる。

次回からは、山川家とその親兄弟や親戚、そして多様な職業の友人たちが織りなす2025年頃のライフスタイルの物語を展開していく。私的なライフスタイルの話題が中心になるが、ビジネススタイルや社会システムの話も含まれるし、先進的な低エネルギー・省資源機器も登場する。社会の変革や技術の進展というテーマだから、筆者の独断や偏見も入るだろうが、どこまでサステナビリティを高められるか考えてみたい。



(イラスト：海老原ケイ)